



| | |
|--------------|---|
| Title | 追憶 |
| Author(s) | 町田, 匡子 |
| Citation | 懐徳. 1927, 6, p. 81-84 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/88752 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

追憶

町田匡子

此度懷徳堂の方々の御力で、追悼録が編纂されますこの事、就きましては何か書く様にこの御言葉でございましたので、何だか大變不遠慮の様にも存じましたが、皆々様の厚き御好意の存じます所を体し、拙き一文をものしまして、地下の亡き兄への追悼と致し度く存じます次第でございます。

初めに當りまして、懷徳堂の方々の御靈方に對し、心から厚く御禮申上げます。

〇〇様、

ほんとに早いものでございます。

今日は兄が亡くなりましたから、丁度六月目の忌日に當ります、こうして早咲きの菊の一輪を靈前に手向けまして、寫眞に對しますと、過ぎし日の思ひ出の種々が、恰も蜘蛛のいをたぐる様にうかんで來るのでございます。

〇〇様、

私共は早く父を失ひましたので、殆んど兄の方で育つたも同然でございました、こんなわけで追慕の情も一入なのでございます、父の亡くなりましたのは、まだ私が九才の時、兄は未だ大學の學生でございました、兄が大學を卒へまして、國學院大學、豊山大學、高師附屬中學の三校に講師として就職致しますや、母は私と妹を連れまして、國許からはる／＼兄の所へ引うつる事になつたのでございます、其頃住居は小石川の傳通院の傍でございました、何しろ今の様に交通機關の發達した便利な時代ではなかつた事でございますから、三校兼職は餘程劇務の様に思へました、然し兄はこの忙しい中から、私共の教育には非常に意を用ひて呉れまして、折にふれ時につけては、教訓的な話を常に聞かせて呉れたものでございます、また未だに記憶に残つて居る所でございますが、毎朝貝原益軒の十訓、四書の素讀をかゝらず實行させられたのも此頃でございます、また兄は非常な親孝行人でございます、父の亡き後は一入年老いた母を大切に致したものでございます、母は早くから目がうすくなりましたものですから、常に眼藥を用ひて居りましたが、そのさし役は必ず兄自身がやつたものでございます、私共は危険が伴ふとの理由で決してやらせませんでした、また夕方になりますと、必ず母の腰をもみつゝ、色々な世見話を聞かせまして慰めるのが日課でございました、萬事がこう云ふ風でございましたから、永年兄と一緒に居りながら、只の一度も兄が母に口返しをしたのを耳にしたことがなかつたのでございます、此んな事は當然の事ではございませうが、仲々實行出來難いことでございます

まして、私は小供を戒める際には、必ず兄を引合に出すのが常でございます、其後私も妹も兄の手で嫁ぎ、兄も亦廣島の方へ轉勤致しまして後、母が私の居りました鳥取の方へ参ると申すと、必ず自ら送つて参り、また歸ります時には、必ず自ら迎へに参つたものでございます、而も母が私方へ滞在中は、殆んど毎日の様に安否を尋ねて参り、眼薬がなくなる頃になりますと、催促もせぬ内にちやんと小包便で送り届けたものでございます、かくて一朝母が病みますや、總てを擲ち凡る手段を講じまして、殆んど日夜介抱致した由で、愈々臨終に際しまして、母は『これだけ孝養を營んで貰へば、何も思ひ残すこともない』と申して、大往生を遂げたのでございました。

私達の教育に意を用ひて呉れましたのも、一方には父の遺言を遵奉する孝心のあらわれとも見られるのでございます。

兄の性格はと申しますと、元來漢學をやつた人なんだから、堅い／＼所謂謹嚴者流の人間だろうとお察しのことゝ思ひますが、實は極く優しい人でございまして、怒つた顔など一度だつて見たことが御座いませんでした、然し優しい中に何處か胃し難い所がありまして、私など前に出ますと、頭が自然に下がるのでございました、こんな所が參禪などから得る精神修養の結果ではあるまいかと存じます。

また非常に潔癖家でございまして、常々身の廻りをきちんとしまして決して散らかしたことがない

人でございました、常に自分は物をさがしたことがないと申して居りました程でございます、死にま
した際でも、机本箱は申すに及ばず、凡そ兄の部屋の物で亂雑になつていたものは一物もなかつた、
と云ふことを姉から聞いたのでございました、凡そ兄の一舉一動は、皆私共の模範とするに足るもの
でございました、こふ云ふ兄を早く失ないましたるは、私共にとつて實に残念な極みでございます。
まあずいぶん長くなつてしまいました。

〇〇様。

今日兄の忌日に貴方がお出で下さり、兄の思ひで話を聞いて下さいましたことを、私は心から御禮申
上ます、この上もない意義ある追悼の一日でございました、恐らく地下の兄も喜んで瞑して居ること
ゝ思ひます。

(九月二十五日記)